

## Aktiengesellschaft.

Bd. I. S. 324. 長谷部説 ② 頁344-5. Kap. 9. 剰余価値の率と分派.

„1729の貨幣=あるいは商品所有者が資本家たる正統な現存のたけに自由にならばならぬ。価値額の最小限は、資本制生産の発展段階が異なれば変化し、また与えられた発展段階にあり、また生産領域が異なれば、その特殊な技術的諸条件の如何に依りて相異なる。ある種の生産諸領域は、1729資本制生産の初期にあい2すえ、1739の年にはまた存在しないよう資本の最小限を必要とする。292とは、時として Colbert 時代<sup>17</sup> 佛蘭西におけるが如く、また現代に至るまで独29幾多の国家におけるが如く、久は私人に對する国家的補助金を喚起し、また時として、ある種の産業および商業部門の経営のための法律上の独占権を有する會社\* 近代の株式會社の先驅者<sup>18</sup> の形成を喚起する。”

\* 29種の社団は Martin Luther は „独占會社”と名づける。

Bd. I. S. 350. 説 ③ 頁45-6. Kap. 11. 協業

„プロシア及びドイツの國王や、イギリスの神政者<sup>19</sup>等の久る権力は、近代の社會においては資本家に移つた29あり、292とは、彼ら個々別の資本家として登場するが、それと株式會社にあり29如く結合資本家として登場するがには係りあふ。”

Bd. I. S. 660ff. 説 ④ 頁132-3. Kap. 23. 資本制基礎の一般の法則。

„集中 (Zentralisation) は、既存の諸資本の配分を變更する29あり、社會の資本の諸構成部分の量的成群的量<sup>20</sup>の變更にあり、起り、一方に



た。い。2 資本がある一人の手で、膨大な量の増加しているが、他方、い。2 資本が多数の個人の手から奪われるからである。ある并えられた事業部門では、この下で下した諸資本が、一個の個別資本に融合するようなことである。集中がその極限に達するであろう。<sup>\*</sup> ある并えられた社会では、社会的総資本が一人の個別資本家と唯一の資本家社会との手で合併されるようなことである。この瞬間には、初めにある限界に達するであろう。

<sup>\*</sup> (第四版の注。——最近の注は、そのp. 419, Trust は、少くとも一事業部門の大経営の全部を合併して、實際上の独占力を有する一大株式会社が形成されることにあり、その目標に突進している。——英. Engels.)

Bd. I. S. 661. 記④ 頁133. Kap. 23.

集中は、産業資本が、他の作業の規模を拡大することと得せしめることにより、蓄積の働きを補う。

す。2. 大規模に拡大。

蓄積の結果であるが、集中の結果であるからである。

また、集中が Annexion gewalttätig。

○ 併呑は、暴力的方法で行われる。——この場合には、特定の諸資本が、他の諸資本に対する優勢を引力中心とする。そして他の諸資本の個別の凝集を破壊し、次いでこの個別の凝集された諸資本を吸収する。—— mittelst des glatteren Verfahrens

あるいは、平滑に形成された。または形成されつつある。多数の資本の融合が、

○ 株式会社の形成により、平滑の方法により行われるからである。この経済的效果は、依然として同じである。

Bildung von Aktiengesellschaften

Bd. I. S. 661. 記④ 頁134. Kap. 23.

た。明かに、円形が螺旋に移行する再生産により、資本の漸次的増加たる蓄積 (Akkumulation) は、社会的資本の主要諸部分の量的成増を變更するわけでは、集中 (Zentralisation) に比較すれば、全く緩慢なやり方である。

蓄積により、若干の個別の諸資本が、鉄道を敷設しように努める。待たねばならぬとすれば、また世界に鉄道はないであろう。

これに反して、集中は、株式会社の媒介により、たちまちに鉄道の敷設をなし遂げた。

mittelst der Aktiengesellschaften

また集中は、かくして蓄積の効果を増加せしめ、促進すると同時に、資本の技術的構成における変革を、擴大し、促進する。

Bd. II. S. 156. 記⑥ 頁18. Kap. 8. 固定資本と流動資本。

た。い。2、労働手段の場所的に固定された。土地は根を打ちし、この事情は、固定資本のこの部分に對して、諸国民の経済における一独自の役割を割りあてる。これらの労働手段は、外に送られ、商品として世界市場で流通することはできない。この固定資本に対する所有名義は、變更される。すなわちこの固定資本は、売買され、そしてその限りに、觀念的に流通する。この所有名義は、たゞは、株式の形態において、外に市場で流通する。だから、この種の固定資本の所有者たる人物の交換により、一國における高の可動的部分に對する、その常置的な物資の固定された部分の比率は、変化するであろう。



Bd. II. S. 230 記⑥頁151. Kap. 12. 労働期間.

これに反し、発展する資本主義時代——一方では莫大な資本が個人の手で集積される。他方では個別資本家と他は結合資本家（株式會社）が現われ、また同時に信用制度も発展している時代においては、資本家の建築請負業務が個々の個人の注文による建築よりもむしろ例外にすぎない。これは市場の中で家屋を建てたり市区を建造することを業務とする、——あたかも個々の資本家が請負業務として鉄道を敷設することを業務とするのと同じように。

Bd. II. S. 231. 記⑥頁153. Kap. 12

労働期間が著しく長く規模が大きい事業の遂行は完全に資本制生産の領域に帰する。また、[一方では]資本の集積が著しく顕著となり、他方では信用制度の発展が資本家に対し自分自身の資本と他人の資本とを投下し従つて子に賭けるという好都合な方を提供しているところである。とはいえ、生産に投下される資本がその充用範囲に属するかどうかという事情は回転速度および回転期間に与える影響もないといふことは自明である。

Bd. II. S. 232. 記⑥頁154-5. Kap. 12.

かくして、労働期間の短縮がたいしてその短縮される期間のあいだに投下される資本の増大と結びついていて、投下期間の短縮に比例して資本の投下量の増大も起る。2に想起すべきは、社會的資本の貯存量を度外視すれば、問題は、生産=消費生活手段——またはこれらと對する支配——がどの程度に分散または個々の資本家の手で結合される

いるか、かくして諸資本の集積がその範囲に達しているか、といふことと帰着するといふことである。信用は、それによって一人の手における資本の集積を媒介し、速く且つ高まるべきものである。労働期間の、したがってまた回転期間の短縮に貢献する。

資本投下の大いなる反響

Bd. II. S. 230. 記⑥頁263-4. Kap. 15. 回転期間の影響。

逆に、流通期間がしたがって回転期間が延長されるならば、追加資本の投下が必要となる。資本家が追加資本を所有する場合には彼自身のポケットから。だがこの場合には、その資本は何らかの形態で、貨幣市場の[構成]部として投下されるであろう。それは自由に処分されるものたらしめる場合には、それは在来形態から解放されねばならぬ、すなわち例えは、株式は売却され、預金は引出されねばならぬであろう。かくしてこの場合には貨幣市場の直接の影響が生じる。

Bd. II. S. 349-350. 記⑥頁340. Kap. 14. 剰余価値の流通。

これ以上は事態は、それが現実において生起するまでに考察するならば、将来の使用のために堆積される潜在的貨幣資本の形成が成り立つ。

(1)、銀行預金。これは銀行が現実には自由に使用する比較的に僅かな貨幣額である。この場合には、貨幣資本の堆積は名目的なものである。現実には堆積されるのは、貨幣要求額——引出される貨幣と預入れられる貨幣との間の一均衡が生じるから故にのみ貨幣化されるものである（それが何時か貨幣化されるから）貨幣要求額——である。貨幣として銀行に預けられるのは比較的に小さな額にすぎない。







金融經濟論

岩崎書店版。  
“現代経済学辞典”所収 頁489以下

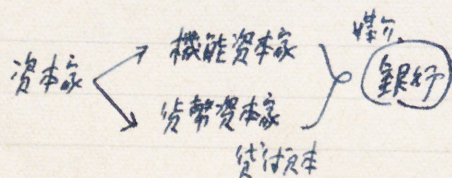
(山崎 三郎  
豊川 卓二

- 貨幣の支払手段とL2の機能、—— 商品の掛売、—— 商業信用の萌芽

- 0 商業信用。——信用対象は「資本」(Kredit)。現代の信用は「信用組織」。  
 1. 商業信用は商品実現の過程の機能資本家間の機能資本家との相互に存在する信用(Verkehrskredit)。  
 2. 商業信用は「貸付」である。遊休資本は「産業資本」より「商業資本」よりある。

- 銀行信用.

信用。  
資本主義の発展 → 貨幣資本の蓄積 → 貨幣取引業者 → 遊休貨幣の蓄積  
、貨幣取引業者の発達と並進して信用制度の他、<sup>方</sup>側面から  
利子付資本手帳、貨幣資本の管理上の加、貨幣取引業者の<sup>差</sup>  
特殊な機能としての発達し、貨幣の貸借、貯蓄の特殊営業と  
なつてゐる。従つて貨幣資本の現実的貸主と借主との間の媒介  
者たる機能の果す。



信用銀行

- (1) 機能資本と貨幣資本 = 貸付資本と  
関係  
貸付資本は運用と実現により機能資本  
の運動を反映するのみならず、機能資本と資本  
家の相互分配の方法、
- (2) 債権者と債務者と関係は固定。  
分離  
貨幣資本家 (= 債権者) 所有者。  
産業資本家 (= 機能資本家)
- (3) 貸付資本 = 利子付資本 であるが、銀行  
利子は不可分のものがある。

貨幣文本亦以 2 枚 12 信用取引 19 重華者  
貨幣取引は 29 文本の唯一流通形態

Пражский

“给付取引” 基本的独立的取引

商業信用。

- (1) 機能本相互の關係

- (2) 機能次第から、ある時は債権者12、ある時は債権者12と3。

- (3) 利子は固有である。

機能の本質は2分2分

貸付取引は株主資本の流通形態の  
一つにすぎない。

是吸引子 如基态的吸引子。



## 貸付資本の源泉

### (1) 純粹な貨幣資本の蓄積

貨幣資本の貸付は唯一機能する貨幣資本家の貸付資本の蓄積。

個別的資本家、金融業者、金利生活者 etc.

蓄積の源泉は——貸付利子、策起人利得、回収債権 etc.

### (2) 機能資本の循環過程における貨幣形態における遊休資本

① 一回転期に生産された商品が販売により貨幣資本に回収される  
その追加資本。

② 逐次生産過程に投下される貨幣資本の準備金形態にある。

③ 固定資本更新のための準備積立金。

④ 貨幣形態にある剰余価値は未だ企業に投下し  
たか一定の大きさに蓄積されたい。

### (3) 貨幣資本家、中々階級、労働者等の所得

これは個人所得として一時的に涌上り  
不付の消費と他の在り蓄積される。

### △ (4) 信用制度による作用の結果として貸付資本の蓄積

以上三つの源泉  
貸付資本は可能  
な機能。

その貨幣は貸付資本に転化する可能性をそれ自体として持っている。  
これら現実性への転化は信用制度により行われる。

すなわち、信用制度は貸付資本に対する需要を充足させることにより  
信用の流通量を造出し、それによって貸付資本に転化する。

⑤ これは貸付資本の供給である。源泉は貸付資本の源泉である。

## 銀行の機能

### (1) 貸付資本 → 機能資本家

純粹な貨幣資本の機能

社会的 —— 貸付資本の代表者 ↔ 産業資本  
貸付資本の代表者 ↔ 貸主

### (2) 産業・商業資本の貨幣形態 → 貸付資本

一切の遊休資本は銀行に集中

貸付資本の所有は社会的

### (3) 所得 → 貸付資本

(4) 貨幣流通の法則により —— 二つの法則により設定された範囲  
内では直接に購買手段及び支払手段を造出し（銀行券及び  
預金・創設）、資本循環の法則に適合しこれによって貸付資本に転化  
する。



Kuruma, Samezo.

久留田鯨造：マルクス恐慌論研究。北隆館。1949年刊。1.

p.66, u. p.67. 現在吾々に与えられている「資本論」三巻の全体は、経済学批判の本来的構想に對しては 果して いかなる關係をもつてあるか？

それについて 四種の見解。

1) 「資本論」三巻は 経済学批判の全構想中の基礎的部分を形成する「資本」中の更に基礎的な部分。——即ち「資本一般」に當るものと考へられるであろう。(1858年4月2日附 Engels 宛の手紙参照)。

2) それは——その中には「競争」、「信用」等にかんする固有の研究が含まれてゐるとする見方から——いわゆる「資本一般」のみならず「資本」の全般に該當するものと考へられるであろう。

3) 「資本論」三巻に於ては たいして 資本にかんする研究が盡されてゐるわけではなく 労賃及地代にかんする詳細な研究もまた既に行われてゐるとして 理由は、2——「資本論」三巻は たいして 構想中「資本」のみならず、更に「土地所有」及「賃金労働」をも包含するところにある。

4) 「経済学批判」の中絶と共に 本来的構想もまた 全然変更されたところとする立場から——その最初の構想の全体に代るべき 簡括的、完成的な著述である。

1) Kautsky:

a) K. Marx; *Zur Kritik d. politischen Oekonomie*, S. V. [4]

b) *Theorien über den Mehrwert*, I. Bd. S. XI-XII.

邦訳、大原研究所パンフレット 19号 23-24頁。

c) K. Marx, *Das Kapital*, Volksausgabe v. K. Kautsky, S. XXXIV.

2) R. Wilbrandt, *Karl Marx*, III. Aufl. 1919. S. 96-97.

赤松要訳「カール・マルクス研究」219-220頁。

3) 河上肇。

a) 資本論入門、第一巻第一分冊 48及53頁。

b) 社会問題研究、84冊、2頁。 [2]説7採ル

4) 福本和夫。

経済学批判のたぐひ、200頁、210頁。

5) Henryk Grossmann, *Die Aenderungen des ursprünglichen Aufbauplans des Marxschen „Kapital“ und ihre Ursachen*. (Archiv für die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung, XIV. Jahrg. 2. Heft. S. 305 ff.)

[4]説7採ル

Wilbrandt 説、批判、437頁。

Grossmann, 論據(?)。

a) 「*Zur Kritik*」新版へ、Kautsky, 序言中、一節。

b) 1863年8月15日附 Engels 宛、Marx, 手紙。



Der Briefwechsel zwischen F. Engels u. K. Marx. Bd. III. 3.  
„habe alles umschreiben müssen“ S. 142-143.

“すゝ2をひく”返すねほ”きうきうた”

2624  
G. 1. 全体系根本的変更? 推測 [2]  
Karl Marx, Briefe an Kugelmann, Berlin 1924, S. 23.

c) 1866年10月13日附, Kugelmann 宛, 手紙

★ 1. 全著作 Das ganze Werk は以下9諸部に分れる。  
第一巻 文本の生産過程、第二巻 文本の流過過程、第三巻 総過程、諸姿態、第四巻 学説史。第一冊は最初9二巻を包含する。第二冊は、僕が予想では第三巻を、第三冊は第四巻を包含するであろう。4. 僕は第一巻12節2頁の最初から始まることと、BPS Sanchez 出版の旧巻9内容と商品及貨幣と題する一章9中12要約するのと、代要とと考えた。~~~~~ 旧巻9叙述は特12商品9分析は何ら9欠陥があったに相違ないからである。

反証大 [1858年3月11日 Lassalle 宛 手紙二通]

〔“资本一般”〕 { 〔《经济学批判》第一分册中〕 第一、价值、第二、货币、  
第三、资本一般（资本，生产过程，资本，流通过程，两者，  
统一即与资本及利润、利子）包含于……”

Der Briefwechsel zwischen Lassalle und Marx,  
Herausgegeben von G. Meyer, 1922. I, 120.

[ "Theorien" 第三卷, Kantokky, 序言.

4.

<sup>9</sup> 1862年12月執筆、推定4th Mar, 手稿、127.

第一篇“资本生产过程”、第三篇“资本及利润”、名付。

(\*) 1866.10.13. 最初の定本は「第一巻」で、第二巻は出版後。  
⑨ 1862年12月28日。Kugelmann宛。手紙; a.a.O. S.13-14.  
(\*) 「第二部」は今ついに完成した。~~~~~  
それは第一分冊の継続である  
それは実際には、本来第一部の第三章を形成する筈であ

たて3949、RPS “本一般”と包含する12文字あり。

從12 29中12は 諸文本の競争及信用制度は含れ  
21支い。

p. 84-85.

1. 現行の「資本論」は維(Groenmann)の主張する  
 如く、経済学批判の本来的なアングルの全体に代るべき総括的  
 な著述ではあり得ない。それは單に「資本一般」を包含  
 するに止まる。「資本」の叙述の最後の部分たる競争及  
 信用は、その中にまだ含まれてゐない。従つて土地所有、  
 賃労働、国家、外口商業及世界市場に關する固有の叙述  
 もまたもとよりその中に含まれてゐない。これを考へられねば  
 ならぬのである。

G.1 證據(?)

d) [Wilbrandt, 所説=反対派] " 但 (Max) の地位、  
賃労働、外口商業を後に至つたはしめ2 取り扱つており2" あったと  
いふことは 果して正しいであろうか? Wilbrandt は " 本論 " の  
中に記せる 第292 頁の論議を分析し 気付かされたらしい。  
(p. 304-8)



反証 „資本論”における賃金及地代に關する論述は果して「賃労働」及「土地所有」に關する固有の論述であるか否か?

賃金 1) K. Marx, Das Kapital (Volksausgabe), I. Bd. S. 478. 改造社版 ② 頁 524.

„賃金の形態は如何に説明を要することは、賃労働の特殊研究に (in die spezielle Lehre von der Lohnarbeit) 屬する問題である。本書の与へべきことは否である。”

地代 { ii) Das Kapital, III. Bd. 2. Teil. 1921. S. 153. FPIR ⑤ 頁 155.  
iii) A.a.O. S. 154. FPIR ⑤ 頁 156.  
iv) A.a.O. S. 158. FPIR ⑤ 頁 160.

? 疑問 1858年4月2日附 Engels 宛、手紙  
最初予定、変更!! „地代は零と規定される。換言すれば、特殊な経済的関係としての土地所有は、これはまた問題にはならない。”

① 変更、次第

(1) 1862年6月18日附 Engels 宛、手紙

↓

(2) 1862年8月2日附、手紙

„早速29卷 [即ち「資本一般」] の中に、挿入の支

即ち第125頁に於ける「命題の例証」として6.

章として、~~資本~~ 地代の理論を挿入しようと思つてゐる。

6.91. [蓋し「資本一般」中二包含される要素の外に、価値、生産価格へ、転化、問題、考察、地代——就中絶対地代——を肉に或程度、説明する。決定完全のアイディアを挿入する。]

„資本は如何に造られた剰余価値の一部を土地所有者の手に帰属せしめるといふだけの土地所有を研究する” — 254

6.93.

„以上記したことは、Grossmannの満意を遂げた論據に如何に換付し、それら如何に採り足らぬこと、本来のプランは——少くも骨子の口は——その後如何に變更されたかを見るべき理由は毫も存しないことと明らかになり得ると同時に、更に進んで、現行の「資本論」は本来のプランに「資本一般」に當るものがあること、即ちそれには更に「競争」及「信用」が続き (その上には) ⑤「株式資本」が続きべきことが如何に疑問の余地がないこと、これによつては、六大部門のひとりの「資本」が終結するべきであること、そしてこれには更に「土地所有」及「賃労働」、並に「國家」、「實際商業」及「世界市場」が続き、かくして如何に経済学批判の全体系は完成するべきであること——を如何に明らかにすることである。”

⑤ 1858. 4. 2. „(-躍に共產主義に移らうとする) [資本] 最も完成された形態としての、同時に如何なる矛盾をもつて239、株式資本。”



193-94

4

Marx, 恐慌論

“剩餘價值學說史”第二卷“資本の蓄積及恐慌”

Marx, 経歴的、固有、恐慌論 711p.

右、その内容、実質は、1. ルカ=ヨリ以て、段階=属する

1. 準備的考察を以てアリエト。

“資本論”中、恐慌=カズル程の論述。

資本一般、——王の“理想的平均=カズル”資本家の生産方法、内的組織、——論理的敘述、諸階程=カズル  
その問題へ、論及=止まる。

95

要するに、Marxの恐慌論は、その経済学批判の体系と共に未完成の状態で残されたものと明かである。

195. “恐慌の闡明”のMarxの全構想と、  
その構想の経済学批判に対する関係。

恐慌、闡明、Marx, 本来の構想、——根本的“恐慌”  
、本質=カズル、——把握=カズル決定する。

“19世紀における商業恐慌、殊に1825年及び1836年の大恐慌は、Ricardoの貨幣理論を更に発展せしめられた、その適用の新たな機会を与えた。これらの恐慌は、また、Humeが興味をもった16世紀及び17世紀における貴金属の価値下落、或はRicardoが研究した18世紀及び19世紀初頭に於ける紙幣の価値下落の如き個別の経済現象と見なされ、世界市場の暴落とあり、又は資本家の生産過程の根本的要素の矛盾の爆発とある。”

“経済学批判”1921年刊、Kautsky版、8. 195.  
宇高訳、頁244。

8

“世界市場恐慌は資本家の生産のあらゆる矛盾の現実なる総合と見られ、且又強力な調整として把握されねばならぬ。”

新版頁259. (剩餘價值學說史、第二卷第二部、頁282)

“資本家の生産のあらゆる矛盾は一般的世界市場恐慌に於て集合的に爆発する。” (同上、頁318). 新版、頁291.



1950.6.24

9.

久留間説=対スル疑問点.

- (1) 現行「資本論」が「資本一般」ヲ取扱フツエトスルヲバ、  
即チ、四種、見解、ウチ、チ一ヲ採ルヲバ、  
第三卷=取扱ワレタル「競争」及「信用」ハ、<sup>理解スルハチ</sup>  
アルカ?

p. 84.

Cf. 1863年12月、手紙.

「Yレハ 實際=... 本来チ一部、第二章ヲ形成スル管ヲアツ  
トコロニ、即チ「資本一般」ヲ包含スル=過チナ。従テ「Y  
中=... 諸資本、競争及信用制度、含レテナ。

p. 45.

剰余価値学説史 第三卷チ一部、頁263.

「依テ 商品、Yレ 価値=於テ賣ラレエト假定サレ。  
資本家由「競争」觀察サレナ。同様=「信用制度」ニテ觀察  
サレナ。.....」

p. 45.

同書、第三卷、頁12.

「資本、運動—競争ト信用ト、学説史、後=於テ和  
初テ論ビタル所ナ。

✓ p. 66.

「チ=... Yレハ — Yレ 中ニ、既ニ「競争」「信用」等=内ル  
固有、研究ガ含マレタル見方ナ — Yレ 中「資本一般」ニ  
テナ。」「資本」全般=該當スルニテ考エラレタルナ。

1.

1. スター-4.

「言語學とマルクス主義にツいて」

「アカデ」 1950.6.24. No.1049.

○ Marx「言語」=カナル規定.

(1) 「Das Kapital」 Bd. I. p. 80. A.版.

「価値 諸使用対象、規定、言語ト同ジク、  
社会 (人々) 社会的産物 ナル。

(2) 「経済学批判序説」 宇高訳、批判、頁323.

「社会、外部=於ル個別化サレ、人々、生産<sup>力</sup>ニハ  
、生活ニ共=語ル諸個人、言語、緊達トク=  
等シ、一、背理ナ。

(3) 同書、頁324.

「最ニ緊達シ 言語、最ニ緊達シ 言語ト諸法則ナ  
諸規定ヲ共通=モツテ、Yレ 緊達ナスニ、チニ、Yレ 一般  
ナニナリ共通<sup>的</sup>ナリ、Yレ 個別ナ。

(4) 「資本制生産=先行スル諸形態」 頁7.

「自然ニ組成サレ、種族的共同性、アルハ、群 団性。  
— モ コ フ イ テ ヨ ナ ラ バ — ハ、人々、生活ト活動  
ト、客觀的諸条件ヲ占取スルチ、チ 前提 (血統、言語、慣習、



等々=アル 親近性) 7"アル。

(5) 同書 頁22.

“ ヲルズ人 = アテハ、何カ、諸家長カタガニ遠クハレハテニ  
森ノウケニ居住シテイタテアテ、ソユニオイトハ、共同体、諸成員、  
素性、言語、共同、過去、共同、歴史、等々、ウケニ、ハナリ、独自の  
ニ存在スル 統一カアエラレタイル”。

(6) 同書, 頁25.

4 反对二、 $\forall$  自体トシテ、 $\forall$  人との共同体、一面ニオテ、言語、血統、華ニカスル共同性トシテ、他人的所有者ヲ $\exists$  存在ノ前提トサセケル。即チ、他方ニハ、 $\forall$  人、実サニハ、共同ノ諸目的ノ $\forall$  人ニ対シ、现实的ナ集合、 $\forall$  人ニ $\exists$  存在スル。

(7) 同書 頁37.

11 (集團、抽象性—— $\sigma + \eta$ ,  $\forall$  諸成員  $\eta$   $\epsilon$   $T$  に、言語、  
等々) ミノホカニハ、 $\tau$  共同體的  $\tau$   $\epsilon$   $T$  — ハ、 $P$   $\tau$   $\mu$  カニ、  
ハルカ  $\mu$  (此處の諸條件、産物  $\tau$  アル。)  $\eta$   $T$   $\epsilon$   $H$ : 他々、人間  
 $\tau$   $\mu$   $\eta$   $T$   $\epsilon$   $H$ 、故に、アル人間の集團、自然の成員  $\tau$   $\mu$   $\eta$   $T$   $\epsilon$   $H$ 、負  
担有 言語  $\tau$   $\mu$   $\eta$   $T$   $\epsilon$   $H$ 、言語 = 關係スル  $\epsilon$   $T$   $\mu$   $\eta$   $T$   $\epsilon$   $H$ 、 $P$   $\tau$   $\mu$   $\eta$   $T$   $\epsilon$   $H$ 。  
他々、人間、生産物  $\tau$   $\mu$   $\eta$   $T$   $\epsilon$   $H$ 、言語 ハ、無意味  $\tau$   $\mu$   $\eta$   $T$   $\epsilon$   $H$ 。トコロヲマテ、  
財産王同様  $\tau$   $\mu$   $\eta$   $T$   $\epsilon$   $H$ 。

(8) 同書 頁41.

4. 生物的人としての自然的+生産諸条件(一ツハ、自然的  
ニ組成せし社会、種族、等々ハ其の所属するステプル。又エ  
ハ、コトハ、ステニ、社会コトハ、等々ヲメテ条件ナリ。

(9) 同書、頁46、

〃 再生産ノ行為ヨリニ成リ、客觀的諸條件カ変化スル、  
 ~~~~~。ヨリミテハ、又々生産者タ自身ニ自分ノウチニアツ  
 シ素質ヲ生ミテ、生産ニヨリテ自分自身ヲ發展セシメテ  
 アツシ諸力ヲ成シ、アツシ諸觀念、アツシ交通諸様式、  
 アツシ諸需要ヲ成シ、アツシ言語ヲ創造シテ自分ヲ改造  
 スルヲ得ル。〃

(10) "トイツエ・イテオロホー" 三木清訳 頁 50.

「人間が語り、想像し、表象したコトを以て出発せし、或は又語り得る、思惟せしむる、想像せしむる、表象せしむる人間が

出発せし、よれは肉体を以て人間に到達せしむる、現実=活動せしむる人間が

出発せし、故に現実的+生活過程からして、その生活過程、イデオロギーの反射と反響、発展を以て叙述せしむるべき。



(11) 同書 頁60.

「精神」は「物質」=「付カレタル」の「運動」  
 70%自身=「物質」、この場合「物質」、運動する「空間」、  
 音、簡單=「言語」、形式=「現れる」。言語、意識  
 ト「起源」時「同じ」る。——言語は「実践的」、他人向  
 =「存在」する。従って「私自身」=「存在」する「現実」  
 的「意識」である。よって「言語」、意識「同じ」、初め他人  
 向、交通、欲望「必要」から「発生」する「言語」。

(12) 「マルクス遺稿、経済学・哲学ノート」 日下訳、頁156.

「思维自体、要素、思想、生命要素、要素として、言語は、  
 感性的+自然である。」

1. 恐慌の一般的可能性 (I)

Kapital. I. 8. 48.

第三章 貨幣と商品流通、二、流通手段 (a) 商品・変態、  
 “販賣と購買の同一性” “販賣と購買の対立分裂”

2. 恐慌の一般的可能性 (II)

Kapital III. 8. 101.

全上

三、貨幣 (b) 支払手段。

“商品譲渡の29価格の實現から時間的分離”

3. 恐慌のより一層発展した可能性。

“資本の生産過程と流通過程の統一なる再生産過程に結びつけ

る212と39、直接的な搾取と實現の条件との間の矛盾。

$$IIc = I v + m$$



日本経済新聞、1950.6.28. (水)

# 「米参戦に反対」 共和党議員団

(ワシントン26日発UP=共同)。米上院の共和党議員は26日評議会議を開いた結果、朝鮮における戦乱に伴って米軍が戦争に卷込まれるという点に全員の意見一致した。共和党上院議員会の議長ミケン議員は会議の終了後こう語った。

われわれは米軍が韓国に對し軍需品その他援助を与へるべきという意見は一致した。米軍が参戦する義務を負つたことは全くなき、またこの事件のたがひは米軍が戦争に卷込まれるべきではないという点に一致した意見であった。

米務、国防両省の朝鮮の事件について述べるところからすれば、ソ連はソ連の訓練され、装備を与えられた北鮮軍の攻撃の準備を整えていることを米紙の報知線が米口に警告したことは明かである。会議はこれについて、米務、国防両省の態度が批判された。

# 「ソ連は不介入の態度」 純粹の国内戦と見る

(ワシントン26日発UP=共同)。ワシントンで觀望筋によれば、ソ連政府は朝鮮における内戦について中立不介入の立場をとるであろうとみられている。ワシントンでは朝鮮における戦況は純粹に国内的な問題と考えられている。またソ連は合法的な材肉と認めない。米連朝鮮委員会のどんな決定にも影響を及ぼさぬという立場をいままでいばしば明かにしてきた。

信夫 清三郎

日本資本主義研究の課題と成果

季刊経済思潮 第一輯

193-194

「現在の革命の性質とこれ、三つの場合を想定すると分る。

1. 社会主義革命 —— 日本にブルジョア民主主義が完全に実現され、この場合には、革命の性質は純然たる社会主義革命となる。ブルジョア民主主義の完全な実現とは、農奴制の完全な清掃から共和国まで含み、全ブルジョアジと全プロレタリアトが直接に對立し、この最後の斗争が共和国の母胎として行われる。

2. ブルジョア民主主義の任務を廣げたる社会主義革命 ——  
ブルジョアジが封建主義に對する徹底的な斗争を回避し、ブルジョア革命においてブルジョア民主主義が完全に実現されず、絶対主義が残存している場合、これは絶対主義がその階級を基礎として、単に制度物的表現として、ソートロギーとして残存するにすぎない場合、革命の性質は、そうした農奴制的、絶対主義的な遺物とやがてという民主主義的任務をもちながら本質においては社会主義革命であるという意味で、ブルジョア民主主義の任務を廣げたる社会主義革命となる。この場合のブルジョア民主主義の任務は、革命の本質的と目標とはなく、社会主義革命の道から実現するべき副次的な意義をもつてはなないものである。

3. 社会主義革命へ急速に転化する傾向をもつたブルジョア民主主義革命 ——  
ブルジョアジが封建主義に對する徹底的な斗争を回避し、ブルジョア革命においてブルジョア民主主義が完全に実現されず、農奴制的地主と絶対主義が残存しているという点については、



第二の理解と異ならないが、しかも、絶対主義が依然として階級支配の物質的基礎と見なす、相対的な独自性を保ちつつある場合、革命の性質は、社会主義革命へ急速に転化する傾向をもったブルジョア民主主義革命となる。しかも、このブルジョア民主主義革命は、ブルジョア階級によつては遂行されることかできない。なぜならば、ブルジョア階級はすでに絶対主義と妥協してしまっているから。したがって、ブルジョア民主主義革命を遂行する主体的な勢力は、農奴制の遺物によつて最も苦痛をうけているプロレタリアートと農民であり、ブルジョア民主主義革命が達成された時点では、それは急速にプロレタリアートと農民の最後の解放をめざす社会主義革命に転化する。すなわち、ブルジョア民主主義革命の意義は、この場合には、ブルジョア階級が完成できなかったものをプロレタリアートと農民が同盟の力で完成するとともに、プロレタリアートと農民が自己を解放するたのみの階級斗争を最も自由に展開することかできる母胎を創造するにある。なぜならば、農奴制の遺物はプロレタリアートと農民として自己の敵をはつきりと認識することかできたからであつて、徹底的なブルジョア民主主義革命によつて実現された民主主義共和政こそ、「プロレタリアートとブルジョア階級との最後の決戦が徹底的に戦われうる国家形態」（エンゲルス、家族・私有財産および国家の起源、岩波文庫版、頁235）。だからである。

おおよそ以上の三つの想定が現在の革命の性質によつて成りたつてあるか、要は、絶対主義と農奴制の遺物などによつて評価するかとはいふことはなかつていられるわけである。

大谷省三

半封建制？  
半封建性

農村における半封建性の残存について、

——農業恐慌論に関連して——

経済評論 昭和25年6月号

問題：現在の農業恐慌において、半封建的な地主的土地所有は、いかなる意義をもつか。

→ 現在の農業恐慌の本質的把握  
農地改革後の基本的性格（何？）

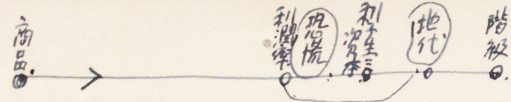
に関連をもつ。

- (1) 農業恐慌理論は、一般恐慌理論の深化。
- (2) 農業恐慌と農業恐慌として特殊化するところのものは、資本主義社会における不可避的な歴史的现实として、「土地の私的所有」によつて形成せられる「地代」の存在にほかならない。

★ 大内 九郎 批判論文参照、「経済評論」昭和25年

- (1) 一般恐慌理論と農業恐慌理論との関連。  
一般恐慌理論と地代論との関連。 “資本論”=エンゲルス “地代論”、意義、  
現行 経済学、篇別構成。——Marx: Zur Kritik.....  
資本論と “篇別構成”=ミハイル マルチ 計画との関係。  
1921 “計画変更”、内容。





Marx  
 ○当初「計画」が「変更」され、「再編成」されて「現行」資本論の「結果」を見解。  
 「資本論」の「自己」完成セル著作「結果」の「カエルト」。「地代論」  
 「資本論」=「結果」。理論は「固有」部分から「トリヤラレイル」。  
 ソ、場合、「地代」。「利潤」。「分岐」。「平均利潤率」が「説」カレタ  
 後「ハズメテ」論じラレル。平均利潤、剰余価値、分配「抽象」の  
 段階「向」テ「ト」ル。  
 「恐慌」。「利潤率低下」法則「下」テ「究極」的ニ「解決」サレウ  
 トル。少クモ「地代」篇「ヨリ」テ「段階」テ「解決」サレウルトル。  
 「貨幣資本」ト「現実資本」。「章」ニ「重点」ヲ「テ」見解「ヲ」見ヨ。  
 「(一般)恐慌理論」=「地代論」ヲ「媒介」スル「スト」ニ「ヨツテ」「農業恐慌理論」が「成立」スル「ヲ」考「エ」方。

1847. 「哲学の貧困」  
 「労働」の「自然価格」は、即ち「労働」の「最低」限に「外」ナラナイ。

1848. 「共産主義宣言」  
 「労働」の「平均価格」は「労働」の「最低」限にある。即ち「労働」の「生活」を「保」つに「必要」な「労働」の「額」である。

1849. 「労働と資本」 (1847年講演に「も」つて)。  
 「労働」の「生産」費と「繁殖」費と、労働者の「生活」費および「繁殖」費とある。この「生活」費および「繁殖」費の「価格」は「労働」で「形成」される。かく「決定」される「労働」は、「労働」の「最高」限と「呼」ばれる。……  
 1000の労働者、幾百万の労働者は、生活し且つ繁殖し「だけ」に「満足」しない。左に、全労働者階級の「労働」は、この「運動」の「内部」に「お」いて、この「最低」限に「一致」する。

1865. 「労働の価格および利潤」  
 「労働」の「価値」は、労働力と生産し、維持し、維持し、且つ「永続」的に「必要」な「必需品」の「価値」に「よ」つて「決定」される……

1858. 42. M → E. → 労働力…「価値」は「幾」らう(?)  
 「労働」は「つね」に「その」最低限に「等」しい、という「こと」が「前提」……  
 「労働」の「運動」と「その」最低限の「増大」または「減少」は、労働力の「観察」に「よ」つて「決定」される。